

母親の育児ストレスに関する研究

松村 恵子*, 植村 裕子, 三浦 浩美, 野口 純子,
小川 佳代, 舟越 和代, 榮 玲子

香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科

Study Concerning Mothers' stress Relating to Childcare

Keiko Matsumura *, Yuko Uemura, Hiromi Miura, Junko Noguchi, Kayo Ogawa,
Kazuyo Funakoshi and Reiko Sakae

*Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural
College of Health Sciences*

Abstract

Many mothers feel actual pleasure in bringing up their children, and mothers have an actual feeling that they are also growing together with the growth of their children. It is also a fact that many mothers have actual feelings of anxiety and stress at the same time. We have therefore carried out examination by comparing the factor structure of mothers having infants who commute to kindergartens or the like to that of mothers having infants who do not commute to kindergartens or the like, focusing on the stress of childcare. The result clarifies that there is a significant component correlation between « child's naughty acts » and « dealing with children and discipline » and that they are common to each other. On the other hand, the result also clarifies that in the case of mothers who have infants that do not commute to kindergartens or the like, there is a significant component correlation between « mother's own time » and « child's naughty acts », « lack of understanding and uncooperative attitudes of husbands » and « dealing with children and discipline », while in the case of mothers who have infants that commute to kindergartens or the like, there is a significant component correlation between « mother's own time » and « childcare by the mother alone ». So they are different from each other. The above suggests that it is necessary to carry out examination from several linking relationships such as whether or not mothers and their infants are living together full-time, working of other people existing between mothers and children and the preparation of the cooperative systems in families and regions in order to construct a support system which enables mothers to carry out childcare while mothers still being in healthy condition.

Key Words: 母親 (mothers), 子ども (children), 育児 (childcare), ストレス (stress),
幼稚園 (kindergartens)

*連絡先: 〒761-0123 香川県高松市牟礼町原 281-1 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科 松村 恵子

*Correspondence to: Keiko Matsumura, Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences, 281-1 Murecho-hara, Takamatsu, Kagawa 761-0123 Japan

緒言

子育て支援のひとつとして《育児相談》を担当していると、子どもを育てることによって、母親は喜びを感じ、子どもの成長とともに自分も成長していることを実感している。同時に、育児ストレスを感じ、乗り越えることができないと重圧感となって、育児ノイローゼや虐待の一手手前になることも事実である。このような実態について、若松ら¹⁾は「今日、母親の育児不安や子どもの虐待が大きな社会問題となっているが、育児の責任が母親一人に集中して、母親が孤立した状態に陥っているのも原因の一つと考えられる」と述べている。

育児ストレスに関する研究では、母親・子どものパーソナリティなどの個人特性や、母親・子ども個人と家族、地域の支援体制など周りの環境といった複眼的視点から取り組む姿勢が重要となる。

これまでに、我々が行ってきた研究では、母親の育児において問題となる現象を分析し、対処行動²⁾、育児ストレス尺度³⁾、育児ストレス要因子の解析⁴⁾、対象特性からみた育児ストレス⁵⁾、就労の母親と非就労の母親の比較⁶⁾について報告してきた。

今回は、幼児との生活時間などに焦点をあて、地域における幼稚園や保育園に通う幼児を持つ母親と、幼稚園などに通わないで家庭で過ごす幼児を持つ母親の育児ストレスについて比較検討し、ストレスの特徴について明らかにすること、母親がより健康な状態で子育てができる支援の方法について検討することを目的とした。

概念枠組み

本研究では、図1に示したように、母親の育児ストレスの背景には、三つの要因〈母親自身に関する要因〉、〈母親を取り巻く環境に関する要因〉、〈子ども自身に関する要因〉があると考えた。そして、Lazarus & Folkman の心理学的ストレスモデル⁷⁾に基づいて、ある出来事(ストレス)に対してストレスフルかどうか(一次的評価)、どのように対処できるか(二次的評価)、どのような行動ができるか(対処行動)、対処行動の結果、どのような反応が生じるか(ストレス反応)という関係性で成り立つ母親の育児ストレス

モデルを考えた。

今回は、このモデルについて、ストレスの一つ〈母親を取り巻く環境に関する要因〉に焦点をあて、地域における幼稚園や保育園と母親の育児ストレスの関係について分析した。

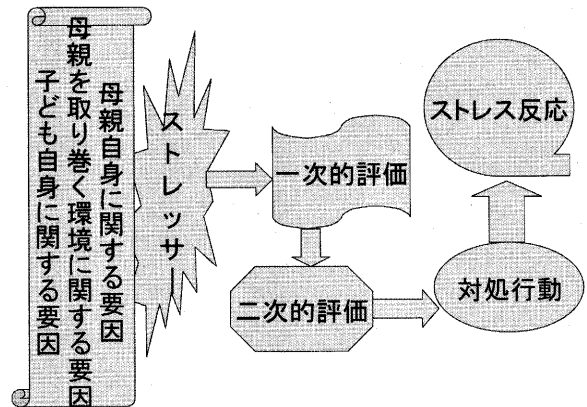


図1 育児ストレスのモデル

研究方法

1. 期間
平成13年10月から平成14年2月とした。
2. 対象
A県で3歳児健康診査に来所した母親513名を調査対象とした。
3. 測定用具
本研究では、母親の育児ストレスの背景には三つの要因があると考えており、これらの視点から構成された測定用具について先行研究を検索した。その結果、発達心理学的視点から育児ストレスに注目して開発した日下部ら⁸⁾のストレス尺度を見出した。この尺度は、子どもの行動、日常生活における母親自身の問題、母親と夫あるいは子どものとの関係という三つの側面から構成されている。妥当性と信頼性が確認できていること、育児に携わる母親のストレスを測定できることから、この測定用具を採用した。
4. データ収集方法
日下部ら⁸⁾の先行研究に基づく育児ストレス尺度(Maternal Parenting Stressor Scale: MPSS)31項目で、評定段階は〈いつもある〉4点、〈ときどきある〉3点、〈まれにある〉2点、〈全くない〉1点のリカート法に

よる質問紙調査法とした。

5. 分析方法

本研究で用いる測定用具は、既に信頼性と構成概念妥当性、一次元性などが確認されているが、調査時期や地域など対象の特性が影響すると考え、統計解析 SPSS13.0j を用いた主要変数の記述統計、因子分析（主成分分析、プロマックス回転）、信頼性分析（内的整合性）、基準関連妥当性（先行研究が外的基準）の確認を行った。

倫理的配慮

測定用具については、先行研究者に文書で研究目的と方法を説明し使用の承諾を得た。調査については、3歳児健康診査を実施する公的機関の施設長に研究目的と方法を説明し承諾を得た後、健康診査を妨げない時と場所を保健師に確認した。対象となる母親に研究目的と方法を説明、協力の意思を確認し了承を得て調査票を配付した。調査票は無記名で封書として対象の特定を回避し、返答は設置した箱に投函または郵送のいずれかで依頼し自由選択とした。

結果

1. 回収率

513部を配付した結果、有効回答数は279部、内訳は幼稚園などに通う幼児を持つ母親130名、幼稚園などに通わない幼児を持つ母親149名で回収率54%であった。

2. 対象者の属性

表1に示したように、母親の平均年齢はいずれも32歳であった。幼稚園などに通う幼児を持つ母親では、就労率が79.2%と高かった。幼稚園などに通わない幼児を持つ母親では、「親同士の交流の場に参加している」、「趣味を持ち満足している」、「核家族」の割合が僅かに高かった。

一方、「育児の相談者や協力者」、「家族の人数や子どもの人数」、「父親の平均年齢と就労率」、「健康状態の悪い家族がいる」については、特徴的な差異は見られなかった。

3. 主要変数の記述統計

幼稚園などに通う幼児を持つ母親の肯定で〈いつもある〉から〈ときどきある〉の評定段

階は、表2に示したように「12. 自分の時間がない」、「8. 言うことを聞かない」、「29. 毎日同じことを繰り返している」、「2. 思うような食べ方をしてくれない」、「14. 一人になれる時間がない」の5項目であった。〈まれにある〉から〈全くない〉の評定段階は「20. 子どもと二人だけで家にいる」の1項目であった。

幼稚園などに通わない幼児を持つ母親の肯定で〈いつもある〉から〈ときどきある〉の評定段階は、表3に示したように「14. 一人になれる時間がない」、「12. 自分の時間がない」、「8. 言うことを聞かない」、「29. 毎日同じことを繰り返している」、「2. 思うような食べ方をしてくれない」、「6. 大人の理屈が通らない」、「13. 子どもに食べさせなくてはならない」、「30. 子どもを育てる為に我慢している事がある」の8項目であった。〈まれにある〉から〈全くない〉の評定段階の項目はなかった。

4. 因子分析と信頼性分析

育児ストレス31項目を変数とした因子分析と信頼性分析の結果、幼稚園などに通う幼児を持つ母親では、表2に示したように、固有値1.00以上、累積寄与率60.46%、因子負荷量0.515以上を解釈し6因子を抽出した。また、先行研究を外的基準と設定した基準関連妥当性（交差妥当性）は確認できた。

因子Ⅰは「11. 聞き分けがない」、「8. 言うことを聞かない」など7項目で《子どもの聞き分けのない行動》と命名した。 α 係数は0.872であった。因子Ⅱは「12. 自分の時間がない」、「14. 一人になれる時間がない」など7項目で《自分の時間》とした。 α 係数は0.852であった。因子Ⅲは「23. 一人きりで育児をしている」、「19. 自分と子どもだけの世界で社会との接点がない」など5項目で《一人きりの子育て》とした。 α 係数は0.811であった。因子Ⅳは「27. 夫が家事に非協力的である」など3項目で《夫の無理解・非協力的な態度》とした。 α 係数は0.874であった。因子Ⅴは「15. よその子どもとの間に問題を起こしたとき対処の仕方がわからない」、「16. 他の親としつけ方が違う」など4項目で《子どもへの対応・しつけ》とした。 α 係数0.755で、因子Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴでは信頼性が確認できた。因子Ⅵは「1. 自分で食べたがらない」、「5. 一人にすると泣く」など5項目で《子どもの食行動の問題》とした。 α 係

数は0.675であった。

幼稚園などに通わない幼児を持つ母親では、表3に示したように、固有値1.00以上、累積寄与率58.04%、因子負荷量0.476以上を解釈し6因子を抽出した。因子Iは「28. 子どもの為に仕事や趣味を制約される」、 「29. 毎日同じことの繰り返しをしている」、 「30. 子どもを育てる為に我慢している事がある」など10項目で《自分の時間》とした。α係数は0.873であっ

た。因子IIは「8. 言うことを聞かない」、 「11. 聞き分けがない」など7項目で《子どもの聞き分けのない行動》とした。α係数は0.820であった。因子IIIは「26. 夫が育児に非協力的である」など4項目で《夫の無理解・非協力的な態度》とした。α係数は0.822であった。因子IVは「17. 家事を全てする時間がない事」など4項目で《子どもへの対応・しつけ》とした。α係数は0.739であった。因子Vは「1. 自分で食べたがらない」

表1 対象の属性

	幼稚園などに通う幼児 を持つ母親 (n=130)	幼稚園などに通わない幼児 を持つ母親 (n=149)
①母親		
平均年齢	32歳 (32.4±4.14)	32歳 (32.6±4.03)
就労	103名 (79.2%)	29名 (19.5%)
育児の相談者がいる	124名 (95.4%)	145名 (97.3%)
育児の協力者がいる	124名 (95.4%)	132名 (88.6%)
親同士の交流の場に参加する	26名 (20.0%)	65名 (43.6%)
趣味を持っている	49名 (37.7%)	71名 (47.7%)
趣味活動に満足している	19名 (14.6%)	32名 (21.5%)
②家族		
核家族	93名 (71.5%)	125名 (83.9%)
複合家族	31名 (23.8%)	24名 (16.1%)
家族人数		
2	1名 (0.8%)	
3	28名 (21.5%)	20名 (13.4%)
4	46名 (35.4%)	80名 (53.7%)
5	31名 (23.8%)	31名 (20.8%)
6	11名 (8.5%)	11名 (7.4%)
7	3名 (2.3%)	5名 (3.4%)
8	8名 (6.2%)	2名 (1.3%)
9	2名 (1.5%)	
子どもの人数		
1	31名 (23.8%)	25名 (16.8%)
2	64名 (49.2%)	92名 (61.7%)
3	24名 (18.5%)	29名 (19.5%)
4	9名 (6.9%)	3名 (2.0%)
5	1名 (0.8%)	
父親の平均年齢	35歳 (35.2±4.98)	34歳 (34.8±4.83)
就労	121名 (93.1%)	140名 (94.0%)
健康状態が悪い家族がいる	14名 (10.8%)	10名 (6.7%)

表2 幼稚園などに通う幼児を持つ母親の育児ストレスの因子構造 (n=130)

項目	因子構造						共通性	平均値	標準偏差
	I	II	III	IV	V	VI			
《子どもの聞き分けのない行動》 α 係数=0.872									
11. 聞き分けがない	0.822	0.261	0.257	0.060	0.363	0.171	0.713	2.30	0.753
8. 言うことを聞かない	0.818	0.254	0.192	-0.034	0.221	0.255	0.696	2.70	0.743
9. かんしゃくを起こす	0.779	0.235	0.230	-0.006	0.329	0.309	0.614	2.24	0.826
7. よく泣く	0.757	0.131	0.311	-0.145	0.289	0.465	0.644	2.33	0.875
6. 大人の理屈が通らない	0.741	0.187	0.186	0.040	0.256	0.143	0.575	2.47	0.747
10. ぐずるとなだめにくい	0.662	0.159	0.172	0.088	0.536	0.282	0.559	2.15	0.884
4. まつわりついて離れない	0.617	0.068	0.243	-0.252	0.251	0.535	0.561	2.29	0.791
《自分の時間》 α 係数=0.852									
12. 自分の時間がない	0.281	0.782	0.286	0.155	0.193	0.218	0.650	2.85	0.890
14. 一人になれる時間がない	0.237	0.765	0.296	0.098	0.240	0.234	0.619	2.59	0.968
28. 子どもの為に仕事や趣味を制約される	0.204	0.746	0.450	0.274	0.175	0.123	0.581	2.31	0.986
21. 自分のペースが乱される	0.283	0.733	0.526	0.199	0.463	0.148	0.633	2.26	0.840
30. 子どもを育てる為に我慢している事がある	0.206	0.714	0.575	0.380	0.276	0.041	0.628	2.47	0.897
29. 毎日同じことの繰り返しをしている	0.109	0.709	0.547	0.242	0.192	0.101	0.575	2.69	1.000
17. 家事を全てする時間がない事	0.146	0.532	0.161	0.157	0.525	0.277	0.498	2.34	0.999
《一人きりの子育て》 α 係数=0.811									
23. 一人きりで育児をしている	0.157	0.429	0.780	0.300	0.304	0.121	0.641	1.51	0.795
19. 自分と子どもだけの世界で社会と接点ない	0.251	0.360	0.760	0.271	0.339	0.145	0.605	1.51	0.777
25. 短時間子どもを預けられる人がいない	0.111	0.349	0.714	0.088	0.223	0.039	0.537	1.53	0.888
20. 子どもと二人だけで家にいる	0.319	0.287	0.692	-0.059	0.443	0.228	0.580	1.37	0.705
18. 仕事を辞め社会とのつながりが切れた	0.129	0.316	0.599	0.167	-0.104	0.249	0.504	1.68	0.553
《夫の無理解・非協力的な態度》 α 係数=0.874									
27. 夫が家事に非協力的である	0.010	0.218	0.217	0.864	0.151	0.127	0.764	2.27	0.947
24. 育児は母親の仕事だと夫は思っている	0.078	0.271	0.257	0.850	0.196	0.099	0.744	2.23	0.906
26. 夫が育児に非協力的である	0.018	0.316	0.189	0.849	0.208	0.223	0.768	1.84	0.789
《子どもへの対応・しつけ》 α 係数=0.755									
15. よその子どもとの間に問題を起こしたとき 対処の仕方がわからない	0.324	0.297	0.257	-0.008	0.770	0.174	0.615	1.81	0.765
16. 他の親としつけ方が違う	0.264	0.166	0.374	0.212	0.752	0.339	0.644	1.90	0.781
22. 子どもの泣いている理由がわからない	0.395	0.165	0.241	0.107	0.732	0.220	0.560	1.57	0.700
31. どうしつけたらよいか分からなくなる	0.178	0.426	0.362	0.386	0.614	0.084	0.522	2.07	0.877
《子どもの食行動の問題》 α 係数=0.675									
1. 自分で食べたがらない	0.274	0.076	0.129	0.109	0.342	0.750	0.614	2.20	0.874
5. 一人にすると泣く	0.504	0.116	0.316	-0.098	0.365	0.646	0.553	2.14	0.872
2. 思うような食べ方をしてくれない	0.231	0.398	0.289	0.290	0.032	0.618	0.556	2.66	0.838
13. 子どもに食べさせなくてはならない	0.190	0.470	0.281	-0.002	0.365	0.598	0.552	2.39	0.959
3. 子どもが小食である	-0.015	0.071	-0.049	0.325	-0.028	0.515	0.446	2.06	1.017
固有値	8.12	3.48	2.28	1.76	1.58	1.50			
寄与率	26.21	11.24	7.38	5.68	5.09	4.86			
累積寄与率	26.21	37.45	44.83	50.51	55.60	60.46			

表3 幼稚園などに通わない幼児を持つ母親の育児ストレスの因子構造 (n=149)

項目	因子構造						共通性	平均値	標準偏差
	I	II	III	IV	V	VI			
《自分の時間》 α 係数=0.873									
28. 子どもの為に仕事や趣味を制約される	0.798	0.294	0.233	0.408	0.228	0.047	0.642	2.42	0.994
29. 毎日同じことの繰り返しをしている	0.762	0.290	0.178	0.338	0.259	0.173	0.605	2.75	1.006
30. 子どもを育てる為に我慢している事がある	0.739	0.362	0.124	0.330	0.081	-0.039	0.618	2.50	0.904
14. 一人になれる時間がない	0.728	0.346	0.335	0.443	0.497	0.055	0.634	2.90	0.960
21. 自分のペースが乱される	0.705	0.335	0.242	0.660	0.153	0.086	0.639	2.46	0.889
12. 自分の時間がない	0.703	0.297	0.228	0.492	0.420	-0.088	0.599	2.85	0.968
19. 自分と子どもだけの世界で社会と接点ない	0.670	0.093	0.295	0.209	0.105	0.115	0.491	2.07	0.966
20. 子どもと二人だけで家にいる	0.654	0.096	0.382	0.119	0.101	0.307	0.572	2.11	1.020
25. 短時間子どもを預けられる人がいない	0.577	0.130	0.350	0.192	0.054	0.158	0.388	1.95	1.110
18. 仕事を辞め社会とのつながりが切れた	0.476	0.111	0.175	0.222	0.111	-0.053	0.242	2.18	0.741
《子どもの聞き分けのない行動》 α 係数=0.820									
8. 言うことを聞かない	0.222	0.786	0.016	0.244	0.420	-0.021	0.716	2.81	0.729
11. 聞き分けがない	0.309	0.777	0.226	0.315	0.138	0.219	0.649	2.37	0.700
9. かんしゃくを起こす	0.248	0.735	0.085	0.400	0.018	0.103	0.595	2.28	0.807
10. ぐずるとなだめにくい	0.198	0.724	0.175	0.163	0.153	0.211	0.586	2.21	0.858
6. 大人の理屈が通らない	0.180	0.627	-0.030	0.283	0.130	0.237	0.425	2.58	0.804
22. 子どもの泣いている理由がわからない	0.391	0.576	0.061	0.461	0.200	-0.011	0.415	1.68	0.696
7. よく泣く	0.222	0.576	-0.072	0.300	0.275	0.553	0.598	2.44	0.895
《夫の無理解・非協力的な態度》 α 係数=0.822									
26. 夫が育児に非協力的である	0.315	0.173	0.859	0.262	0.226	-0.017	0.781	1.87	0.857
24. 育児は母親の仕事だと夫は思っている	0.410	0.102	0.831	0.141	0.179	0.137	0.710	2.24	0.966
27. 夫が家事に非協力的である	0.310	0.210	0.798	0.219	0.331	-0.016	0.704	2.32	1.034
23. 一人きりで育児をしている	0.583	0.151	0.607	0.256	0.095	0.199	0.548	1.89	0.973
《子どもへの対応・しつけ》 α 係数=0.739									
17. 家事を全てする時間がない事	0.446	0.372	0.186	0.783	0.181	-0.004	0.635	2.10	0.952
16. 他の親としつけ方が違う	0.216	0.203	0.066	0.753	0.220	0.146	0.623	2.00	0.744
15. よその子どもとの間に問題を起こしたとき 対処の仕方がわからない	0.309	0.341	0.168	0.719	0.256	0.235	0.557	2.03	0.783
31. どうしつけたらよいか分からなくなる	0.555	0.443	0.133	0.591	0.212	0.273	0.500	2.24	0.826
《子どもの食行動の問題》 α 係数=0.709									
1. 自分で食べたがらない	0.101	-0.027	0.181	0.125	0.759	0.211	0.677	2.31	0.973
2. 思うような食べ方をしてくれない	0.283	0.225	0.208	0.284	0.735	0.199	0.570	2.74	0.839
3. 子どもが小食である	0.099	0.244	0.177	0.126	0.712	0.036	0.543	2.36	1.042
13. 子どもに食べさせなくてはならない	0.471	0.301	0.100	0.404	0.627	-0.047	0.526	2.52	1.008
《子どもにまどわりつかれる》 α 係数=0.604									
5. 一人にすると泣く	0.099	0.228	-0.006	0.114	0.143	0.774	0.628	2.00	0.826
4. まどわりついて離れない	0.227	0.217	0.129	0.313	0.196	0.724	0.590	2.26	0.808
固有値	8.22	2.98	2.15	1.75	1.47	1.41			
寄与率	26.52	9.62	6.94	5.66	4.74	4.56			
累積寄与率	26.52	36.14	43.08	48.74	53.48	58.04			

考 察

など4項目で《子どもの食行動の問題》とした。 α 係数0.709で因子I・II・III・IV・Vでは信頼性(項目の内的整合性)が確認できた。因子VIは「5.一人にすると泣く」,「4.まとわりついて離れない」の2項目で《子どもにまとわりつかれる》とした。 α 係数は0.604であった。

5. 因子成分の相関

幼稚園などに通う幼児を持つ母親では図2に示したように,因子III《一人きりの子育て》が,因子II《自分の時間》と因子V《子どもへの対応・しつけ》で,因子I《子どもの聞き分けのない行動》が,因子IV《子どもの食行動の問題》と因子V《子どもへの対応・しつけ》で有意な成分相関が見られた。幼稚園などに通わない幼児を持つ母親では図3に示したように,因子I《自分の時間》が,因子IV《子どもへの対応・しつけ》と因子II《子どもの聞き分けのない行動》と因子III《夫の無理解・非協力的な態度》で,また,因子II《子どもの聞き分けのない行動》が,因子IV《子どもへの対応・しつけ》で有意な成分相関が見られた。

育児への関わり方についての希望と現実について,厚生労働省委託調査「子育て支援策等に関する調査研究」(平成15年)⁹⁾によると,希望としては,父親の約半数以上は仕事等と家事や育児を同等に重視したいと思っているが,現実には仕事等と家事や育児を同等にしている人は25.9%となっている。男女共参画社会づくりが進む今日ではあるが,育児は約7割以上が母親に委ねられ,多くの母親が育児ストレスを感じているのが現実である。

本研究では,この育児ストレスが母親にとって本質的に悪なものではなく,危機の概念に代表されるように,それを乗り越えることにより成長が達成されると考えている。重要なのは,母親が育児ストレスをいかに避けるかではなく,育児ストレスといかに向かい合い,重圧感となる前に乗り越え,自らの成長を実感できるかであり,そのために何らかの支援が必要ではないかと考えている。

そこで,何らかの支援を見出す方法について,

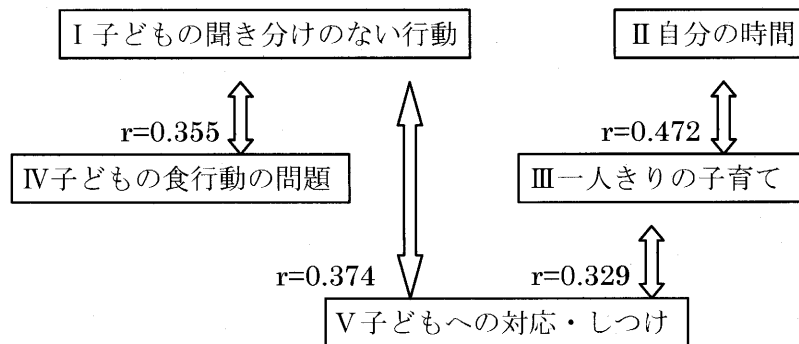


図2 幼稚園などに通う幼児を持つ母親の因子成分相関

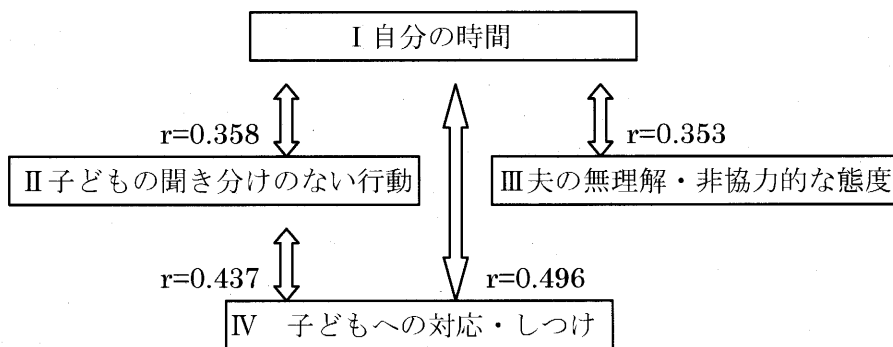


図3 幼稚園などに通わない幼児を持つ母親の因子成分相関

今回の調査で明らかになった母親の育児ストレスの実態の特徴から考えられることを中心に述べる。

第一に、幼児が幼稚園などに通っているかいないかに関わらず、母親の育児では「一人になれる時間や自分の時間がない」がストレスとなっ
ていることが明らかになった。また、これらの肯定が高いことから趣味を持つ時間がないことが推測され、「趣味を持ち活動に満足している」は、半数以下の割合であることと相互関係にあることが示唆された。

これらのことから、母親は子どもが家庭で傍にいるかどうかという生活の場からみた母と子の距離ではなく、母親のための母親の時間、という概念でもなく、一人の人間として女性としてのアイデンティティを意識し確認できる『時間』を必要としているのではないかと推測される。

一人の女性の生活には、母親であったり、妻であったり、職業人であったりなど、様々な状態がある。母親が育児の過程で『一人になれる自分の時間』を求め、そして、家族や地域など周りの人々の支援が可能な社会づくりができると、母親は育児ストレスを感じながらも、趣味などに情熱的に取り組める時間を獲得することによって、ストレスを乗り越える術を発見できるのではないだろうか。このことが、ひいては子どもの健康的な発達を支援する母親に成長できるのではないかと考える。

具体的には、地域における子育て支援として、たとえば、母親が趣味で通うカルチャースクールに子どもを安心して預けられる託児所を設ける、という具体的な取り組みなども必要になってくると考える。

第二に、幼児が幼稚園などに通っているかいないかに関わらず、「言うことを聞かないや、思うような食べ方をしてくれない」といった子どもの行動を統制しようとしても、母親の意図どおりに子どもが反応しないことがストレスとなっ
ていることが明らかになった。これらの肯定が高いことから、『育児＝しつけ』という意識や、育児を『子育て親育ち』という相互浸透行為として捉えるよりも、子どもを育てているという単一な側面から見た意識を強く持っていると推測される。

複合家族から核家族へと家族形態が変化し、しつけの方法など子育てのコツについて、親から子へ世代を超えて伝承されることがほとんどなく

なった今日、子育てのコツを伝えていく人が必要な時代が来ているように思われる。

母親が育児の過程で、子どもは何を感じ思い考えているのか、どうしたいのか、したいことがわからなくて困っているのかなど、見守る、尋ねる、対話するなどの術を身につけることができれば、『子どもをコントロールする』という意識は払拭されることが推測される。そして、実は母親も子どもに育てられていること、つまり「子育ては相互交渉であり相互浸透行為」¹⁰⁾であることを実感できるようになるのではないだろうか。

そのためには、母親と子どもの成長発達を支援できる専門職者の連携による、子育て長屋のような、地域におけるコミュニティづくりが急務と考える。

第三に、育児ストレスの因子構造では、幼児が幼稚園などに通っているかいないかに関わらず、『子どもの聞き分けのない行動』は『子どもへの対応・しつけ』と有意な成分相関にあることが明らかになった。特に、「どうしついたらよいかわからなくなる」の肯定が比較的高い。このことから、ぐずる、泣く、叫ぶ、物を投げる・散らかす、騒ぐなどの子どもの言動は、母親は聞き分けがないと考えストレスとなっているが、実は子どもの成長発達過程では必ずといってよいほど現れる自然現象である。

人間が各々の発達段階で、どのような発達課題を持っているか、その課題を達成しようとしてどのような言動が必要か、母親が、知識や理論から実際に遭遇する育児の状況と照らし合わせながら理解する、そんな母親の子育てに関する学習を推進する支援が重要ではないかと考える。

具体的には、精神医学者のフロイトが発達理論の構築において、生後2歳までは『口唇期』であると説明したように、人の子は母の乳房を、哺乳瓶の乳首を吸いながら口唇の発達がすすむ。したがって、2歳頃までは子どもがお乳を欲しているのは自然現象といえるが、母親から見れば、子どもの歯も生えてきているのに、いつまでたってもお乳を欲しがるのは聞き分けがないと受け止めてしまう。

子どもが母親の立場になって物事が考えられる発達段階になるまで、できる限り、母親は子どもの立場から育児を考えることはできないだろうか。

保育園や幼稚園など地域で、実は母親も子ども

に育てられているという現実を真摯に受け止めることができるような学習の機会を持つことが重要と考える。母親と一緒にあって理論的・経験的に、よりよい育児について対話する場といった子育て支援の構築が、地域から専門職者に要請されてきているように思われる。

第四に、幼稚園などに通う幼児を持つ母親では、「子どもと二人だけで家にいる」が最も低く（平均値 1.37）、「自分の時間がない」が最も高い（平均値 2.85）。幼稚園などに通わない幼児を持つ母親では、「子どもの泣いている理由がわからない」が最も低く（1.68）、「一人になれる時間がない」が最も高い（2.90）。幼稚園などに通わない幼児を持つ母親では、どちらかといえば核家族、親同士の交流の場に参加する、趣味を持ち活動に満足している比率が高い。

この実態が、図2と3で示した因子成分相関に表れたと考える。つまり、《自分の時間》は、幼稚園などに通う幼児を持つ母親では、《一人きりの子育て》が最も高い有意な相関関係となり、幼稚園などに通わない幼児を持つ母親では、《子どもへの対応・しつけ》が有意な相関関係になっていると考える。

これらのことから、前述したように、「自分の時間」を確保できることに加えて、就労しながら子どもを幼稚園などに通わせている母親では、「一人きりの子育て」に協力してくれる人を求めていること、幼稚園などに通う幼児を持つ母親では、「子どもへの対応・しつけ」について一緒に考えてくれる人を求めていることが示唆される。

第五に、育児ストレスの背景について、母親を取り巻く要因のひとつである子どもが通う幼稚園などは、どのような影響要因となっているのか比較検討した結果、母親は「子どもと一緒に生活空間で四六時中いることから開放されること」、「子育てについて対話する場を求めていること」が明らかになった。

これらのことから、今日までの『幼稚園などに子どもの養育を委ねる』、また、幼稚園は子どもの養育をまかされる、という考え方ではなく、子どもの成長発達、ひいては母親の成長発達のために〈幼稚園などの地域における子育て施設〉に、『子育てについて対話する場の一つとして母親も通う』という発想を持つことが大切な時代を迎えているのではないかと考える。

今後、どのようなことが必要であるのか、必要

な或いは重要とされるプログラムでは、どのような実践が可能であるのか、少子高齢社会における国の経済的な支援や、行政の組織的な取り組みなど、子育て支援の方法についての検討が重要と考える。

結 論

1. 幼児が幼稚園などに通っているかいないかに関わらず、母親の育児では「一人になれる時間や自分の時間がない」、「言うことを聞かないや思うような食べ方をしてくれない」といった子どもの行動を統制しようとしても、母親の意図どおりに子どもが反応しないことがストレス要因となっている。
2. 育児ストレスの因子構造では、幼児が幼稚園などに通っているかいないかに関わらず、《子どもの聞き分けのない行動》は《子どもへの対応・しつけ》と有意な成分相関にあり、特に、「どうしつけたらよいかわからなくなる」の肯定が高い。
3. 母親は育児の過程で「自分の時間」が確保できることに加えて、就労しながら子どもを幼稚園などに通わせている母親では、「一人きりの子育て」に協力してくれる人を求めている。幼稚園などに通う幼児を持つ母親では、「子どもへの対応・しつけ」について一緒に考えてくれる人を求めているといえる。

結 語

育児ストレスは母親自身の問題だけではなく、現代社会の様相が大きく関与する問題でもある。

子育てが、女性・母親の役割、男性・父親の役割であるとかに縛られることなく、人間の在り方として「幼く小さく弱いいのちを慈しむ心」を育てるために、どのようなことが必要なのだろうか。

少子高齢社会が、そして、男女共同参画社会がすすむ現代に生きる専門職者として、育児をしている母親に直接的な力を与えるというよりも、母親が様々な人との交流の中から自己の力や、変化し成長発達する可能性に気づき、自己の内に源泉を湧き立たせることができるように一緒に考えながら歩んでいきたい。

本研究では、母親の育児ストレスの実態を明らかにすることを目的にこれまで取り組んでき

た。今後はこれらの成果を基盤として、これらの延長線上で、地域における子育て支援を実践しながら、その実践と知識や理論に導かれた次元で、母親が子どもが、そして支援者もより健康的な生活を過ごすことができる働きをしたいと考えている。

謝 辞

本調査にご協力戴きました多くの皆様に深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) 若松素子, 柏木恵子 (1994) 「親となること」による発達-職業と学歴はどう関係しているか-発達心理学研究, 83-98.
- 2) 三浦浩美, 植村裕子, 野口純子, 小川佳代, 舟越和代, 榮 玲子, 松村恵子 (2002) 3歳児を持つ母親の育児ストレスにおける対処行動, 第33回日本看護学会論文集-母性看護- 37-39.
- 3) 植村裕子, 三浦浩美, 野口純子, 舟越和代, 小川佳代, 榮 玲子, 松村恵子 (2002) 香川県における3歳児を持つ母親の育児ストレス構造-育児ストレスサー尺度を用いて-, 香川母性衛生学会誌 2 (1): 62-68.
- 4) 榮 玲子, 舟越和代, 小川佳代, 野口純子, 三浦浩美, 松村恵子 (2003) 乳幼児期の子どもを持つ母親の育児ストレス (第1報) -育児ストレスサー因子の解析-, 香川県立医療短期大学紀要 5: 11-16.
- 5) 舟越和代, 榮 玲子, 小川佳代, 野口純子, 三浦浩美, 松村恵子 (2003) 乳幼児期の子どもを持つ母親の育児ストレス(第2報)-対象特性からみた育児ストレスサー-, 香川県立医療短期大学紀要 5: 17-23.
- 6) 野口純子, 植村裕子, 三浦浩美, 舟越和代, 小川佳代, 榮 玲子, 松村恵子 (2005) 三歳児を養育する母親の育児ストレスサー-就労母親と非就労母親の比較-, 香川母性衛生学会誌 5(1): 23-30.
- 7) Lazarus, R. S. & Folkman, S. (1984): Stress, Appraisal, and Coping, Springer Publishing Company, Inc., New York.
本明寛, 春木豊, 織田正美監訳 (2000), ストレスの心理学「認知的評価と対処の研究」(1), 実務教育出版, p3-229.
- 8) 日下部典子, 坂野雄二 (1999) 育児に関わるストレスサーの構造に関する検討, ヒューマンサイエンスリサーチ 8: 27-39.
- 9) 厚生労働省委託調査「子育て支援策等に関する調査研究報告書」(2003)
- 10) 松村恵子 (2005) 母性意識を考える, 文芸社, 東京, p166.

受付日 2005年10月31日